

家庭寮にみる「花嫁修業」という規範の解明

—旧制高等女学校に着目して—

歌川 光一^{※1}

概要 高等女学校について、正課のカリキュラム、課外活動研究は多く蓄積されてきた。本研究は、家居を選択した中上層女性のライフスタイルの探究のために、家政を中心に生徒にパッケージ化された花嫁修業を体験させようとした「家庭寮」に注目した。生徒にとって、同級生との同居生活や教員との交流が思い出深かったと思われ、また、家事の中でも、調理を中心に家計のやりくりを体験したことの意義が大きかった。一方で、夫との同棲という面を除いた役割で構成された家庭生活という矛盾も確認された。

1. 研究背景と目的

戦前昭和期頃に生じた、未婚期に、家庭生活に必要な家事、礼法、遊芸等習得する「花嫁修業」という規範は、旧制高等女学校の教育目標であった「良妻賢母」主義に則る規範として、(それゆえに) 女子教育史研究において等閑視されやすい(濱 2023、小山 2023)。

進学や就職と通じた中上層女性のキャリア形成に注目することは、男性領域で活躍した高等女学校卒業生の人生にフォーカスを当てるという意味で意義深いことは言うまでもない。一方で、家居という進路を選択した中上層の女性のライフスタイルを社会教育史、大衆文化の観点から再検討することで、「家事/教養/趣味」等の揺らぎの系譜を明らかにしていくことが可能(拙稿 2019 ほか)となる。特に、結婚難が生じ、家居の高等女学校卒業生の割合が増えた 1930 年代は注目に値する。実際、「花嫁修業」という規範の存在によって、各種稽古

教室、カルチャー教室(産経学園の前身である「東京婦人会館」が日本初とされる)等の教育文化産業の整備が促されたことが史実として指摘されている(山本 2001、産経学園 2005)。

本研究では、1930 年代に高等女学校卒業生に向けられた「花嫁修業」という規範の解明を目的としている。

なお、家居扱いの女学校卒業生に対して教育を施す主体として、学校、社会、家庭、その他の各種教室(稽古事など)が混在していたと思われ、本研究は「花嫁修業」研究の一部を成すに過ぎない。

2. 研究の対象

本研究が着目するのは、1930 年代頃から旧制高等女学校に卒業生向けに設置された「家庭寮」である。

高等女学校の「家庭寮」は、寄宿舎や、裁縫教室、割烹室、作法室等とは異なる、主に卒業生向けに整備された修養道場であ

※1 聖路加国際大学 准教授

【様式 2】

り、修養室・応接間・客間・茶の間・台所・風呂場等が備えられ、接客作法の実施等が行われた（野田 1983、山本 1992）。

高等女学校や高等女学校同窓会による家庭寮事業は、家居を選択した卒業生に理想的なライフスタイルをそのまま教授する意図が強く、「花嫁修業」という規範の解明に適した研究対象だと考えられる。

3. 先行研究

先行研究では、学校沿革史の確認が中心（野田 1983、山本 1992）であったが、本研究では、旧制高等女学校の家庭寮の教育内容を、校友会雑誌、同窓会雑誌等のより広範な学校史料の収集により明らかにすることを目的としている。

4. 調査対象校

野田（1983）、山本（1982）を参考に、以下の旧制高等女学校を調査対象とした。

【訪問調査】

- ・山形県立谷地高等女学校（1932 年「家庭実習館」）
- ・栃木県立真岡高等女学校（1936 年「報徳家庭寮」）
- ・岐阜県立羽島高等女学校（1935 年「家庭寮」）
- ・島根県立今市高等女学校（1938 年「家庭寮」）

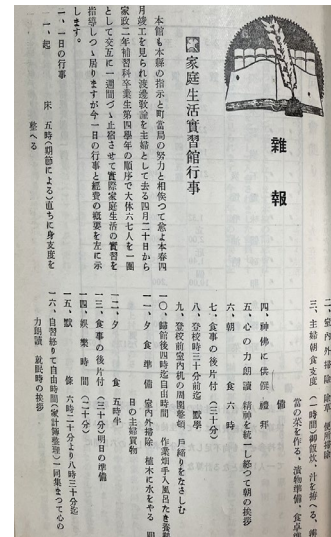
【史料収集調査】

- ・山口県立長府高等女学校（1936 年「家庭寮」）
- ・徳島県立小松島高等女学校（1935 年「家庭寮」）
- ・福岡県立京都女学校（1937 年「家庭寮」）
- ・福岡県立筑紫高等女学校（1940 年「筑紫家庭寮」）

5. 家庭寮の開設と運営

- ・山形県立谷地高等女学校（1932 年「家庭実習館」）

下記が家庭実習館開設の経緯を示した校友会雑誌の記事の一部である。



自 6 月 25 日 至 7 月 2 日					
月	日	摘要	数量	価格	累計 一人費用
7	2	米	25.25	調 4.221	
7	3	粥	22.30	276	
7	4	炭	18.00	500	
7	5	石炭	21.99	249	
7	6	電燈		246	
7	7	味噌	1.32	300	
7	8	醬油	2.00	380	
7	9	砂糖	1.40	225	
7	10	卵	10.00	200	
7	11	魚		420	
7	12	雑穀		200	
7	13	野菜		300	
				調 7.517	調 1.073

備考
上表一人分合計は生徒の持参せし米、野菜、卵等を換算したる総費用にして、生徒が現金にて支拂ひしは持参せしも尙不足したる分を求めしもの六日間にて一人11銭となる計算なり

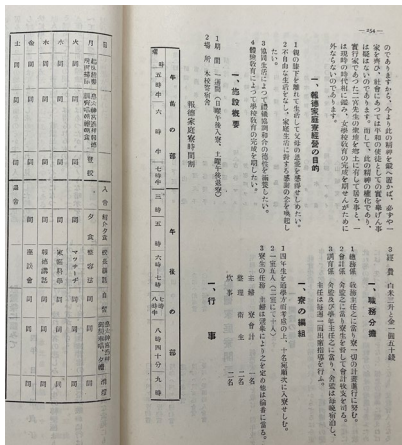
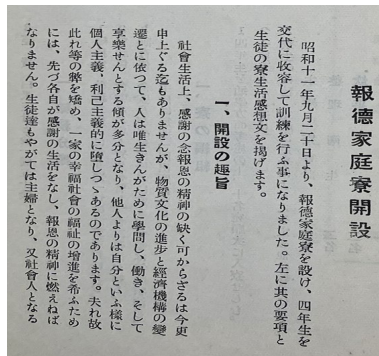
資料 1：『済美会誌』第 8 号（1933）より

谷地高等女学校では、5、6 人で起居を共にし、夜には教員と歓談することもあった。

- ・栃木県立真岡高等女学校（1936 年「報徳家庭寮」）

【様式 2】

下記が報徳家庭寮開設の経緯を示した校
友会雑誌の記事の一部である。



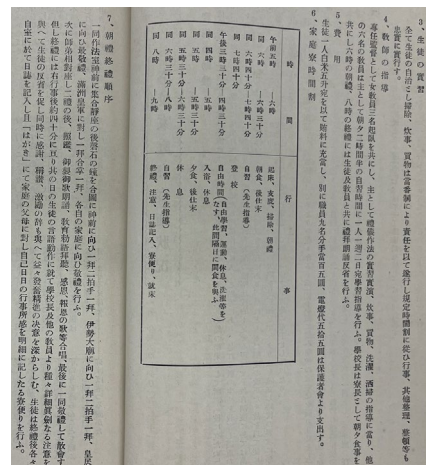
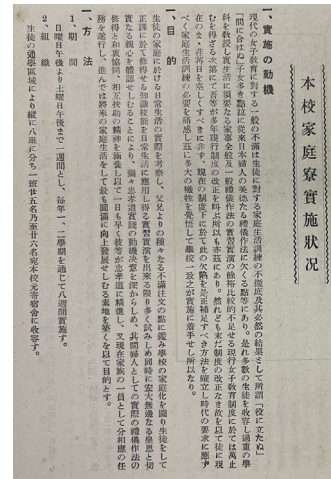
資料 2 :『眞芳宜』第 11 号 (1936)

実際に生徒が教員と交流している様子について、下記のような写真が所蔵されていた。

資料3：家庭寮での学生の様子
(学校所蔵史料より)

- ・岐阜県立羽島高等女学校（1935 年「家庭寮」）

下記が家庭寮館開設の経緯を示した同窓会雑誌の記事の一部である。



資料3：『奉仕一滴』第3号（1936）

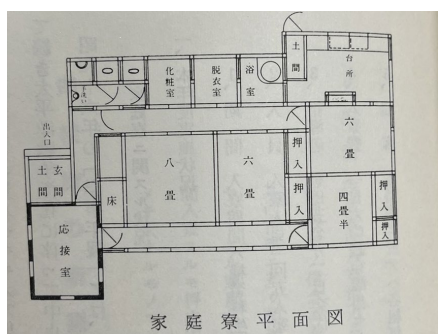
- ・山口県立長府高等女学校（1936年「家庭寮」）

山口県立長府高等女学校において、家庭寮は、創立 25 周年の記念事業として、図書館とともに 1935 年に落成した。

建設趣意書（1935年7月）には、「将来主婦として母としての必要な修養を実際に積むことの出来る学校」となるために、記念館と寄宿舎の一部に、修養室、台所、風呂場等必要な設備を加え、本科の上級生、

【様式 2】

研究科生の修養道場とする旨が述べられている。



資料4：家庭寮・平面図（学校沿革史より）

長府高等女学校では、4年生以上の生徒を対象に5名ずつ班に分け、3～6日間入寮した。寮母（家政系教諭）が指導にあたり、男性教員や外部の関係者が接客作法を実施した。

この他の女学校について、学校沿革史に下記のような家庭寮の様子が示されている。

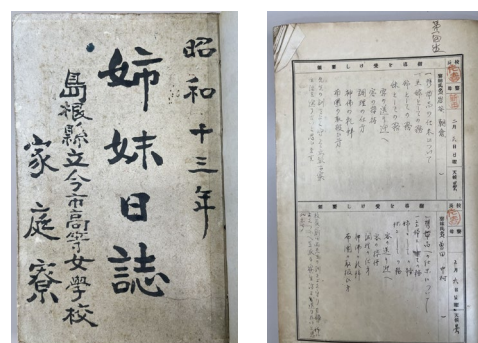
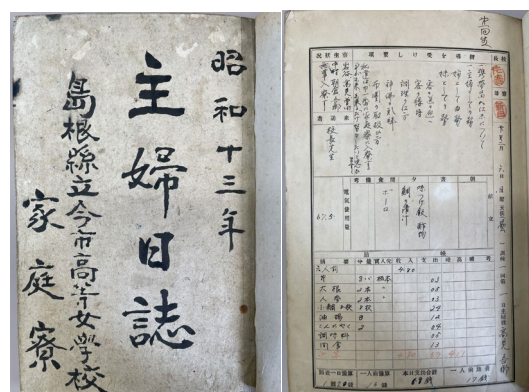


資料5：徳島県立小松島高等女学校家庭寮
での学生の様子（学校沿革史より）



資料6：福岡県立京都高等女学校家庭寮
(学校沿革史より)

なお、今回の調査で、主婦、子どもの任を設けていた島根県立今市高等学校家庭寮の生徒により記録である『主婦日誌』『姉妹日誌』を再発見した。



資料7：『主婦日誌』『姉妹日誌』
(島根県立出雲高等学校所蔵)

6. まとめと今後の展望

「良妻賢母」を教育目標に掲げていた高等女学校について、正課のカリキュラム研究、課外活動研究は多く蓄積されてきた。本研究は、家政を中心に、生徒にパッケージ化された花嫁修業を体験させようとした「家庭寮」に注目した意義がある。

「家庭寮」はそれ自体の目的である、結婚生活に活きたかという達成度合いの検証は難しいが、少なくとも、同級生との同居生活や教員との交流が思い出深かったと思われる。また、家事の中でも、調理を中心に家計のやりくりを体験したことの意味が大きかった。一方で、夫との同棲という面を除いた役割で構成された家庭生活という矛盾も確認された。

今後の課題として、生徒による記録の詳細な検討、学校の卒業生向け事業と（官民の）社会教育事業との関連の検討等が挙げられる。

引用・参考文献（MS 明朝 10.5P）

- 千野陽一. 1979. 『近代日本婦人教育史 体制内婦人団体の形成過程を中心に』ドメス出版.
- 濱貴子. 2023. 『職業婦人の歴史社会学』晃洋書房.
- 今川勲. 1990. 『現代結婚考 国策結婚から国際結婚へ』田畑書店.
- 稲垣恭子. 2007. 『女学校と女学生 教養・たしなみ・モダン文化』中央公論新社
- 伊藤めぐみ. 2011. 「大日本連合婦人会による花嫁学校」財団法人日本女性学習財団『女性の学びを拓く 日本女性学習財団七〇年のあゆみ』ドメス出版, p.161-179.
- . 2013a. 「戦間期における『花嫁学校』の生成と展開」『早稲田教育学研究』(4), pp.39-53.
- 北河賢三. 1982. 「1930 年代の思潮と知識人」鹿野政直・由井正臣編『一九三一年

から一九四五年まで』日本評論社, pp.135-166.

小山静子. 2002. 「花嫁修業」井上輝子ほか編『岩波 女性学事典』岩波書店, p.380.

———. 2023. 『高等女学校と女性の近代』勁草書房.

小平麻衣子. 2016. 『夢みる教養—文系女性のための知的生き方史』河出書房新社.

野田満智子. 1983. 「家庭科教育史における家庭寮教育の系譜(第3報) 家庭寮教育の成立とその実態」『日本家庭科教育学会誌』26(3), pp.35-39.

産経学園本部. 2005. 『産経学園 五十年史』

佐藤健二. 1996. 「花嫁修業」比較家族史学会編『事典 家族』弘文堂, pp.689-690.

田嶋一. 2016. 『〈少年〉と〈青年〉の近代 日本一人間形成と教育の社会史』東京大学出版会.

高田里恵子. 2005. 『グロテスクな教養』筑摩書房.

歌川光一. 2019. 『女子のたしなみと日本近代—音楽文化にみる「趣味」の受容—』勁草書房.

渡辺かよ子. 1997. 『近現代日本の教養論』行路社

矢口悦子. 1997. 「東京婦人会館」東京都立研究所編『東京都教育史 通史編 4』pp.555-564.

山本禮子. 1992. 「施設・設備からみた高等女学校教育の一側面」『和洋女子大学紀要 文系編』(32), pp.59-82.

山本思外里. 2001. 『大人たちの学校 生涯学習を愉しむ』中公新書.

吉田文. 2000. 「高等女学校と女子学生—西欧モダンと近代日本—」青木保ほか編『女の文化』岩波書店, pp.123-140.